

学内最大規模の教室で アクティブ・ラーニングに挑戦。 職員との協業で新しい刺激を受ける

大教室での授業では、教員が学生ひとり一人とコミュニケーションを図るのがむずかしい。その課題解決のため、江泉教授は職員のサポートを受けながら、ICTを活用し、350人規模の授業で双方向性のあるアクティブ・ラーニングの可能性を見出している。



江泉 芳信
法学学術院 教授

わせポチの出席管理で、 授業への積極的な参加意識が向上

今回新たな試みが実践された「国際私法Ⅱ」は、グローバル化を見据え、国際私法に関心を持ってもらいたいという思いから、学部2年生以上が履修できる科目として設置されている。「扱っている内容は基本中の基本ですが、そこからさらに自分で発展させて、先輩たちと議論を深めるなどして将来につながるような授業にしたいと考えていました」と江泉教授は語る。

履修者が350人程度となるこの授業は、8号館106教室という学内最大規模の円形型大教室でおこなわれる。大教室ゆえに学生が積極的に参加できない点を不満に感じていた。「レジュメを大量に作って配っても、準備に時間がかかる割に学生はしっかり読んでくれるわけでもなく、もっと彼らの刺激になるような手法はないのかと悩んでいました」。そんな中、2017年度に職員の教職協働プロジェクトチームから提案を受けたことが、ICTを使った授業改善に取り組みきっかけとなった。

まずはわせポチの活用だ。江泉教授は以前からわせポチを導入しており、前回授業の復習として簡単な設問に答えさせ、回答状況を円グラフで表示するという活用をしていた。これをさらに発展させ、わせポチへの参加を以て出席の記録とすることにした。わせポチでは回答者のログが取れるため、これを後から集計して出席管理に利用するのである。

その結果、出席率向上とわせポチの設問への回答率の向上の相乗効果が得られた。従来よりわせポチを前回の授業の内容を復習する意味を込めて、覚えておいてもらいたいキーワードを思い出させるような形で利用していた。しかし、参加してくれる学生は1~2割に過ぎないこともあり、あまり真剣に答えてくれないと感じていた。新たに「出席管理」という機能も持たせたことで、学生が真面目に取り組むようになり、合わせて学習効果の向上にもつながった。

ただし、ここでカウントする出席は加点要素とはせず、テストが悪かった場合の救済措置としている。というのも、本来は出席を取ることによって縛るのではなく、学生が「おもしろいから出たい」と思うような授業をするのが理想だと考えているからだ。「わせポチの出席管理を職員の人と検討する中で、あくまで先週の復習に役立てるた

めの素材という位置付けにこだわり、加点要素にはしないということにしました。」と江泉教授は話す。

スマートフォンを持っていない学生には通常の出席カードを用意しようと準備したが、トライアル期間を設けて試してみたところ、実際にはそういうケースはなかったという。

授業中に匿名で質問できて、 その場で疑問を解決できる

さらにユニークなのが、わせポチを授業内での質問受付用にするという活用法だ。「最近の学生は目立つことを嫌うのか、大人数の前で質問したくないという心理があるようです。本当は聞きたいことがあるのに分からないままに帰ってしまう。そこをなんとかしてやれないかと教職協働チームの職員との打ち合わせで相談したところ、わせポチの別機能を使ってみたらどうかという提案を受けました」。

わせポチには選択式の問題だけでなく自由記述で答えられる機能もあるが、これを利用して、授業中に質問や感想を自由に投稿してもらうことにした。実際にやってみると、1回の授業につき5、6個の質問が寄せられたという。質問には時間が許す限りその場で答える。「その場合、まず良い質問だねと褒めるところから始めるようにしています。実際にかなりきちんと考えた質問が多かったのも事実で、それをその場で解決できる仕組みができたというのは、受講学生全体にとってもとても良かったと思っています」。わざわざ質問の時間を設けなくても、授業の中でこのような双方向性をスムーズに担保できるというのは、まさにICTの恩恵といえよう。

質問の投稿は匿名とし、さらにその内容は他の学生からは見えないようにした。イタズラなど不適切な投稿がされた場合に、それが即時公開されてしまうリスクに備えるという意味もあるが、学生からは他人の目を気にせずに気軽に質問できるという点もメリットとなる。「実際には質問だけではなく、授業のここが良かったという感想を書してくれた学生もいて、私も励みになりました」。

授業に熱中していると、質問が入ったことに気づけないこともある。その点、この授業では授業に参加して学生の反応を確認し、わせポチの問題作成補助などをサポートする大学院生の高度授業



TAに入ってもらっているため、質問が入ったときには知らせてもらうようにした。今後はこの機能をさらに活用して、高度授業TAの手も借りながら、寄せられた質問をリスト化しCourse N@viに公開することも検討したいと考えている。「同じような疑問を持つ人は必ずいるはずですし、それがその場で消えてしまうのではなく、後々にも確認できるようになっていれば復習にも使えるでしょう」。

法律答案のLIVE添削： 授業中に答案添削を公開する

この授業には、わせポチ以外にももうひとつ注目すべきICT活用方法がある。授業中に、学生のレポートを添削する様子をカメラで撮影してリアルタイムに公開するという試みだ。このレポートは、期末試験に近い形の問題を出題し、学生は答案を作成してCourse N@viから提出するというもので、提出の義務はない。加点もしないという位置付けにしているが、提出されたものについては、良い答案作成のためのポイントを細かく解説して返却する。「義務にしたり成績に反映したりすると、他人のマネをしたりコピーしたりという学生も出てくるかもしれません。そうではなく、本当の実力を付けてもらいたいので、それでもなお出してくれる熱心な学生には、こちらも全力で応えてあげたいと思うのです」。

同時に、提出されたレポートの中から1つを選び、授業時間内に教員が添削。手元を撮影するように固定したカメラで撮影し、それをスクリーン上で公開しながら解説を行う。これにより教員がどんな目線で答案を採点しているかを、提出者だけではなく授業の出席者全員に伝えることができる。

この授業では、法律文書作成のノウハウを小手先のテクニックではなく本質的に理解して体得させることを目指している。基礎的なマナーやルールを示すことで、授業に参加した学生が知識やノウハウが共有できるようにするというのが狙いである。

わせポチを使った質問も、任意提出のレポートも、特定の学生に偏ることなく複数の学生が参加したという。「結構幅広い学生が取り組んでくれました。他の人の様子を見て自分もやってみようという意欲が生まれたのかもしれないね」。

職員との協働で 新たな刺激をもらった

今回の取り組みでは、教職協働チームの職員と協力して新しい手法を取り入れた。この取り組みは、江泉教授自身にとっても刺激的だったと振り返る。「だんだん年を取ってくるとあまり工夫もしなくなりがちです。こういうチャンスをもたらったおかげで自分の頭も整理できたと、学生に向けてどんなメッセージを出したらうまく伝わるのか、自分なりに考えるのも楽しくなりました。正直手間はかかりましたが、新鮮な刺激で自分としてもとても楽しかったです」。

こうした職員との協働への取り組みやICTの活用、さらには高度授業TAの利用など、授業革新への意欲も高い江泉教授。この事例から「わせポチを利用した出欠管理」が学生の授業参加促進のみでなく、出席カード配付によって授業の流れが遮られてしまう問題も解決し得ることがわかり、法学部内で他の教員の授業でも導入が検討されるなど、水平展開の兆しも見られる。「今後は、学生とのやりとりをどうやってさらに増やしていけるかを考えていきたいと思っています」。